

私の戦中戦後の人生

北野典爾 予科1-6
(荒尾市) 航空4-1

私は旧制熊本県立玉名中学校第三十七回卒業生で米寿を迎えておりますが、荒尾市在住の数少ないOBの長老として筆を執ります。

昭和2年に生を享けて以来、軍国主義の波を受けて玉名中学校の卒業を待たずに昭和19年2月に埼玉県にある陸軍予科士官学校（現在の防衛大学）に入校して陸軍の幹部将校を養成する為の1年間の軍人訓練を経て、昭和20年4月、陸軍航空士官学校に入校してパイロットとしての厳しい陸と空の教育を受けておりました。

空の訓練の度毎に、上官から「貴様達は日本を護る為、特攻隊として250キロ爆弾を飛行機に積んで敵艦に突っ込め、その為に遺髪と1年間毎日書いていた日記を実家に送れ」との命令で6月にそれらの品を荒尾の実家に送りました。

8月15日を迎え私の戦中の人生約18年にピリオドが打たれたわけです。復員直前の航空士官学校では激怒する若手将校が中心になって終戦を阻止するため天皇陛下の録音盤を奪うための行動や、航空士官学校区隊長上原重太郎大尉が当時の近衛師団長の森中将を斬殺するなどの暴挙がありましたが、上原区隊長はその責任をとり、雄健神社の境内で割腹自決し、その際、陸士同期生の荒武禎年大尉が自分の軍刀で上原区隊長の首を介錯した話は、戦後、半藤一利氏（夏目漱石の孫娘のご主人）の単行本

「日本のいちばん長い日」にも紹介されています。

また、これを映画化し、最近封切りになった松竹映画「日本のいちばん長い日」（原田真人監督）を見た人も多かったと思いますが、私達も家族一同で映画館で鑑賞し、私は70年前のことを思い出した次第です。

私は、終戦の8月末に荒尾の実家に復員しましたが、九州での高専大学の受験を止め、水戸市の高等農業講習所で2年間の寮生活を送り、卒業後は全農福岡支所に3年、熊本経済連に転勤し、30有余年間農協運動を推進するためのサラリーマンとしての生活を送り、その後地元の農協長、そして、荒尾市長を4期16年の間務めたのが、戦後の私の第二の人生であります。

私の荒尾市長時代には、三井炭鉱の万田坑があり、石炭を海外にも輸出しており市の財政も潤っておりましたが、市長終了前に廃坑となったので、市の活性化の為に寝食を忘れて奔走したことは今となってはよい思い出となっております。



**荒尾市長時代の
北野典爾（平成15年）**

更に、荒尾市の万田坑が昨年世界の文化遺産に指定されたことは、その保存事業に微力を尽くした私の誇りとする所であります。戦中、戦後を生き抜いてきた私の体験から、これからは戦争のない豊かな楽しい暮らしが世界各国にもたらされることを心から祈念しております。